

巻 頭 言

緑鳳学会会員の皆さまにおかれましては、いかがお過ごしでしょうか。お元気に過されていることを切に願っております。

ここに、本会の機関誌『専修・総合科学研究』第28号が出来上がりましたので、皆様のお手元にお届けいたします。

それにしても2020年は大変な年になりました。小杉伸次前会長より会長職を引き継ぐ直前でしたが、新型コロナウィルス（COVID-19）の大流行となり、それ以来、役員会も電子情報での「会議」開催となりました。大学構内にも入れず、大学院事務課の方々とも電話やメールでのやり取りで対応せざるを得なくなっています。こうした状況下で、今年度の大会はオンラインでの開催となりました。本来であれば、本学の大会場に集い、それぞれの研究発表やパネルディスカッションでの質疑応答に花を咲かせるはずでありましたが、コロナ禍のためとはいえ、対面での交流が叶わないとは残念でなりません。

これまでは、我々にとって当然であった日常が、いとも簡単に否定されていることへの衝撃、いわば、人類が構築してきた文化的常識に変更を迫る勢いに、誰しも、手をこまねいて何もできないもどかしさを感じながら、じっと耐えざるを得ないのが現状ではありますが、この人類史的危機を乗り越えるために、世界が団結して「人種」の存続を何としてでも実現していきたいものです。

しかし、こうした事態にもかかわらず、多くの会員の皆さまよりの投稿をいただき、本号の刊行と相成りました。ご執筆いただいた方々には深く御礼申し上げます。また、昨年で大会でパネルディスカッションの座長として係われた小杉前会長には、各パネラーによる発言やフロワーからの質問・意見等を丁寧にとまとめていただきありがとうございます。大会の成果を会誌に反映させる体制が軌道に乗りました。

さて、今年度の大会では、すでにご案内のように、パネルディスカッションを「多発する自然災害を学際的に問う」のテーマで実施することになりました。当初は、いま世界中に蔓延しているコロナ禍の惨劇に見舞われるという事態は想定外でした。その段階では、こここのところ繰り返し甚大な被害を及ぼしている線状降水帯や台風などでの異常降雨や暴風雨による自然災害の発生状況を、学際的に捉え直しその発生要因を探り、また、防災の視点から、地球は、世界は、国家は、地域社会は、そして、我々個人はどのような対応を決断し実践すべきかについての議論を開始すべきではとのスタンスでの提案でした。

ところが、2月以降になると、中国の武漢発とされるこの疫病が世界中に拡大し（パンデミック）、日本でも3月には公立学校の休止が始まり、4月7日には緊急事態宣言が発せられるなど国内での感染が拡大し、その後、この宣言は解除されるも、今はこの原稿を書いている9月中旬であります。第二波を体験するなど現状でも終息のレベルには達していない状況にあります。ということもあり、今年度のパネルディスカッションでは、コロナ禍も自然災害に含め議論の対象にしていくことになりました。

この新型コロナウィルスの感染者数は、9月12日段階の統計では、世界全体で2851万1215人となり、死亡者数も91万6040人に達していて感染の衰えを見せていません。この事実を前にすれば、

コロナ禍は、おごった人間への自然界の戒めとも思わざるを得ない事態なのかもしれません。感染症学の分野からも、これほどの感染力も毒性も強い病原体が大流行したのは人類史の中では一度しかない、それが、14世紀にヨーロッパなどで発生したペスト（大黒死病）だとも言われます。この指摘には14世紀のペスト研究に係わった者の一人として同感するのですが、歴史学の立場からすれば、当時の西ヨーロッパの人口の約3分の1の命を奪い去ったとされるこのペスト流行が、当時の封建制社会の人間の何に対する「戒め」であったのかが問われねばなりません。過去に学ぶという場合には、それに対する解答を示さねばならないでしょう。

以下は私見ですが、この点について多くの識者は、14世紀のペスト流行の体験以降のヨーロッパ世界の大変動という面のみを強調するがゆえに、なぜ14世紀中葉に流行したのかについての分析には無関心なように思えるのです。つまり、ルネサンス、大航海時代、宗教改革などのヨーロッパ中心の国家、社会、経済、政治、科学などの「近代化」の方向性に、ペスト流行による人類存亡の危機克服の鍵を与えてしまったように見えるのです。そのため根本的な原因追及の努力はおろそかにされ、感染症の猛威に対処する地球上の「人種」としての覚悟は自覚されませんでした。その結果、人類は、植民地獲得や帝国主義的支配の強化、さらには、産業革命以降の大量生産・大量消費体制の確立、非ヨーロッパ世界への経済支配による開発の拡大、エネルギー革命による地球自然環境破壊・温暖化、そして、世界のグローバル化を遮二無二推進し、今に至っているのです。問題は先送りされただけだったのです。

以上の認識が正しいかどうかは別としまして、新型コロナウイルスが人類に攻撃を仕掛けてきていることは事実です。北半球では、秋冬の流行の再拡大が心配されています。ワクチンの完成や新治療薬の開発が期待されていますが、楽観視はできないようです。また、今回は何とか終息させられたにしても、我々人類が、今の暮らしや文明の質を変えなければ、つまり、世界各地での土地開発や森林破壊が進み、グローバル化による多くの人々の移動が今後も続くようであれば、新しいウイルス感染症の流行は防ぎようがないとも言われています。世界各地では、すでに「グリーンリカバリー」や「持続可能な開発目標 SDGs」の取り組みも見られます。では、我々はどうすべきなのか、我々のそれぞれの専門性を活かした多面的な研究に基づいた議論を始めようではありませんか。

近江 吉明 緑鳳学会会長（専修大学名誉教授）